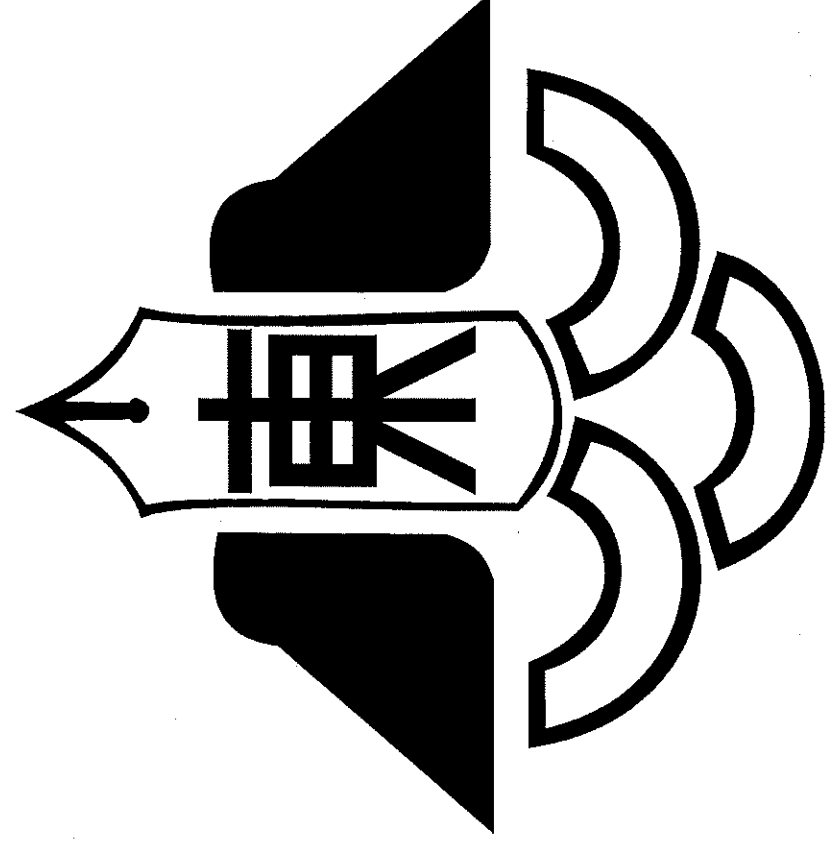


# 平成30年度全国学力・学習状況調査

## 結果の分析



我孫子市立湖北台東小学校

## <国語の調査結果に見られる特徴と現状>

国語 A(主として知識)について、平均値とはほぼ同じとなっている。問題形式から正答率を見ると、選択式の正答率は平均値だが、文章を書き直すなど、自分で答えを導き出す問題に関しては苦手な傾向がある。それは選択式であっても、「書くこと」の領域が平均値よりも低いことからわかる。

ここから児童は「答えの出し方は知ってはいるが、自分で考え、表現することができない。」という実態がわかる。表現するためには、自分の意見や考えを持つことが重要である。学習する目的を明確にすることで、自分の意見や考えを持ちやすくなる。今後は「何のためにこの教材を勉強するのか」を明確にし、子どもたちが自発的に課題に取り組み、表現していくような授業展開を行っていく必要がある。

国語 B(主として活用)については、平均値よりやや低い。問題形式から正答率を見ると、選択式に関してはほぼ平均値だが、記述式に関しては下回る結果となっており、国語 A の傾向と似ている結果となった。

領域別に見ていくと、「話すこと・聞くこと」は平均値となっており、話し合いを題材とした問題では、司会者としての役割を理解し、適切な発言を行うことが概ねできている。話し合い活動は授業だけではなく、学校生活の様々な場面で行われており、実際に体験する中で身につけていったものと考えられる。

「書くこと」に関しては、国語 A(主として知識)同様、苦手意識が見受けられる。推薦文を書く問題であったが、「どのように書けば相手に効果的に伝わるのか」という視点が欠けていることがわかった。これは他者への関心が薄く、物事を客観的に見ることが苦手だという実態を表している。質問紙調査からも地域や社会の出来事などに対する興味関心が低いという結果が出ている。

これらのことから、継続的に行っていくことの重要性がわかる。推薦文などは、話し合い活動とは違い、普段から書くような物ではないが、「物事を多角的に見る」という視点は毎時間の授業の中で意識していくことができる。また、教材として、子どもたちが身近に感じるような、地域や社会の出来事を取り上げることにも必要になってくる。自己中心的な考えから脱却するために、様々な資料や考えに触れる機会を作っていくことが大切である。

「読むこと」の領域については国語 A(主として知識)では平均値を上回っている。国語 B(主として活用)でもほぼ平均値となっている。質問紙調査では、読書の時間が「1週間で1時間以上読む」と答えた児童が平均値を大きく上回っており、読書習慣が身につけていることがわかる。その結果、内容をしっかりと読み取り、問題に答えることができている。しかし、読み取ったことを、目的に応じて書くことができていない。今後は「書くために読む」といったような授業展開をしていくことも必要になってくる。

## <算数の調査結果に見られる特徴と現状>

算数 A(主として知識)については、平均値を上回っている。問題形式から正答率を見ると選択式であっても、自分で考え、答えを導き出す問題であっても平均値を上回っており、基礎・基本が身につけていることがわかる。しかしその中で、計算や円周率の意味を問うような問題に関しては苦手意識が見られる。四則計算はしっかりと身につけているので、今後は、「なぜそのような計算・公式になるのか」という意味を問う授業を継続的に展開していく必要がある。「計算ができればいい」公式を使えばいい」という単純な思考から脱却し、意味や理由について深く思考する習慣をつけることで、場面に応じた適切な方法で課題解決に取り組みめるようになってくる。

算数 B(主として活用)については、平均値を上回っている。問題形式から正答率を見ると、選択式・記述式の両方で平均値を上回っており、持っている知識を活用し、課題を解くことができている。

しかし、問題によっては平均値を下回るものもある。複数のグラフから情報を読み取り、それらを関連づけて考察する問題は、平均値を下回っている。この問題の誤答の傾向を見ると、全体の半数以上の児童がグラフを一つしか使わずに回答している。ここからも国語と同様に、「物事を多角的に見る」という視点が欠けている実態がわかる。

今後は教師がこの点を意識して授業を行っていくことが大切である。表面的な情報ではなく、その資料の裏にある情報を引き出す授業展開を行わなければならない。そのような多角的な視点を養っていくためには、読み取った情報をグループで検討し、そこから新たな資料を作成し、それをを用いて再度グループで検討し、お互いの情報を関連づけて結論をまとめ上げていくなどし、深く思考する習慣を身につけていく必要がある。日常的に、全教科において行っていくことで自己中心的な考えから脱却することができる。考える。

### <理科の調査結果に見られる特徴と現状>

理科については、知識に関する問題・活用に關する問題、共に平均値を上回っている。問題形式から正答率を見ても、選択式・記述式共に平均値を上回っており、知識を活用した課題の解決を概ね行うことができている。

しかし誤答の傾向を見ていくと、実験に対し、これまでの学習を通して獲得した知識を基に結果を見直し、構想することではあるが、自分の考えと異なる他者の予想を把握し、その予想が確かめられた場合に得られる結果を見通して構想することが苦手であるということがわかった。

これらのことから、理科からも「物事を多角的に見る」という視点が重要ということがわかる。グループで考えを交流させ、お互いの結果の見直しについて考えていくことが必要である。単に正解を導き出すような話し合いではなく、それぞれの考えを持って、「その考えであるならば、このような結果になるはずだね。」と他者の実験の構想まで行っていくような授業展開をしなければならない。

### <学校質問紙調査の結果にみられる特徴と現状>

教員の現状調査では、教員研修や教材研究に意欲的に取り組んでいることがわかる。研究教科が算数のこともあり、特に算数に対する意識は高い。今後は勉強が好きな児童を育てていくために、算数だけでなく、全ての教科で子どもたちが主体的に学ぼうとする意欲を育てていかなければならない。そのためにも他教科の研修や教材研究を充実させていく必要がある。

### <児童質問紙調査の結果に見られる特徴と現状>

全国平均や県の平均と比べて、どの教科においても学習意欲が低い。この学習意欲の低さは、授業で改善していかなければならない。計算や公式を用い、ただ課題を解いていくことが学習意欲の向上に単純につながるものではない。一番大切なことは、その課題を通して子どもたちに何を教えるかということである。将来役立つような力を身につけていくためには、教員全員が共通理解を図り、授業に取り組んでいかなければならない。本校では算数の研究を行い、本年度は「豊かなかわり」に焦点を当てて取り組んでいる。東小の児童の実態を生かした学習形態や話し合いの仕掛けを研究し、学習意欲の向上につなげていかなければならない。

## <これからの具体策>

### 1. 分析(実態把握)

・算数タイム・校内習熟度テスト・我孫子市標準学力調査・全国学力学習状況調査を利用し、児童の分析を正確に行っていく。

### 2. 研究・授業改善

・研究の内容を職員に定着し、共通理解を図る。研究推進委員会を定期的に関き、指導案について検討する機会を多く設ける。学校の研究と取り組みの方向性が一致しているかを確かめ、職員に研究内容がより定着するようにする。また、毎週木曜日に設定している研修日に、何を行うのかを明確にしていく。

・算数の研究を軸とし、実態に合った授業を算数だけではなく、全教科で行っていく。

・教職員同士がお互いの授業を参観し、話し合う機会を日常的に行うようにする。自分の授業を客観的に見てもらい、アドバイスをもらう機会を設けることにより、今後の授業改善に生かしていく。

・小中一貫の観点から湖北台西小学校・湖北台中学校との連携を密にしていく。お互いの学校の研究を参観し、理解を深め、実践に役立てていく。